

EU 発「チューニング」の世界的広がりとは日本への示唆・インパクト

松塚 ゆかり

(一橋大学大学教育研究開発センター教授)

ボローニャプロセスとチューニング

1993 年の欧州連合 (EU) 設立以後、欧州委員会 (EC) は人的資本政策の要として教育及び訓練の欧州統一指針を次々と打ち出した。中でも大学を中心に据え、欧州高等教育圏の構築を目指して 1999 年に開始したボローニャプロセスは、国によって進行の度合いは異なるものの着々と進展している。欧州高等教育圏構想の基本方針は、欧州域内の大学が学位の構造及び修学課程の年数や内容を始めとする教育制度や評価基準について共通の枠組みを設定し、相互交流を促進して欧州全体の教育・研究力を強化していこうというものである。当初は域内の統合が目的であったが、その後の 10 数年の間にボローニャプロセスの諸施策は欧州を越えて世界的に拡大している

中でも急速な拡大を見せているのは、「チューニング (Tuning)」である。大学教育の科目、コース、プログラムなどの到達目標、学習成果、養成される能力、教育実践に要する資源を明確にし、教員が中心となって大学間で確認し合い共通理解を形成しようとする取組である。楽器をチューニング (調律) するように互いの教育の内容や成果を理解し合う準備を経て、実際の「演奏」、つまり留学や研究交流へとつなげようとする。2000 年にオランダのフローニンゲン大学とスペインのデュウスト大学が共同で開始した後、2004 年に南米で Tuning Latin America、2009 年には北米に Tuning USA、2010 年に Tuning Russia、2011 年に Tuning Australia と Tuning Africa、2012 年には Tuning Canada と Tuning AHELO が発足した。

これらの参加地域に対して欧州委員会は経済的援助から技術支援まで何等かの関与をしている。一方で、チューニングは (1) 多様な文化や慣習を尊重すること、(2) 独自の適用を重視すること、(3) 大学と教員の自律性を尊重すること、(4) 各国の教育、訓練、雇用制度への順応性を高めることを重視としており、実践の目的や活用の在り方は各地域 (国) に委ねられている。チューニングが急速かつ世界的に拡大しているのは、地域のニーズに併せて柔軟な適用が可能であること、また、運用の際に国単位の制約がなく、人の国家間移動とともにその実践と成果が自由に共有され得るからなのであろう。その点、むしろ国別に管理される質保証制度よりも波及力があるのかも知れない。むしろその背後には、大学教育の国際的質保証の枠組みを待たずに学生や研究者の交流が急増する中、大学教育に世界的な「並び」を持たせ得る仕組みが求められているとも言える。

日本へのインパクト

事実、世界各国 (地域) におけるチューニングへのニーズは一様ではない。チューニングを設立した欧州では、学生の大学間移動とエンプロイアビリティ (就職力) を高めて、社会のニーズに対応できる大学教育を実践することを主な課題としている。アメリカでは、公立大学を中心とした教育の質保証に加えて、2 年制から 4 年制大学への編入を円滑にすることが重要な目的とされている。オーストラリアでは、学習成果に基づく質保証を推進する方策として適用されている。

日本の大学教育を囲む現状を見ると、数年来質保証の要求が高まってきたことは周知の通りであるが、これについては機関別認証評価を始め、外部、内部を含む様々な評価制度が適宜設置されている。しかしながら、質への要求と相まって大学進学者の増大と多様化、グローバル化、財政の逼迫などの課題が押し寄せ、とりわけ大学教育のグローバル化に伴う教育の説明責任への要求は、これまでの大学教育の在り方を大きく変えようとしている。教育の質を国際的観点から判断するためには、国の異なる大学間で教育の内容や成果を相互に理解できる、国籍にとらわれない共通のプロトコールが必要となる。これ無くしては、留学に伴う単位や学位の価値も曖昧であるとされ、連携学位や共同学位の付与も根拠に乏しいものとなる。何よりも学生にとっての留学のメリットが漠然としており、学生の主体的留学を促すことができない。

チューニングはそのような課題に応える「ソリューション」として機能することとなるだろう。日本の大学生が「内向き」である、ということから、国外に出る学生が少ないことが説明されることが多い。しかし、どこに行けばどのようなことを学ぶことができ、それによりどのような将来設計が可能なのかをより明確に予測することができれば、学生はより安心して海外へと渡ることができるだろう。逆に海外の学生に対して日本の大学がそのような情報を発信できなければ、海外の学生は日本への渡航を躊躇することとなるだろう。

情報を充実させ、それを広く共有することこそが、今後大学間そして国家間の流動性を高め、相互交流に基づいた問題意識や価値観の共有、意思疎通、そして独自性や時に特異性の理解や容認を可能となる。チューニングは大学を通して人の移動を円滑にし、国家間、地域間の相互理解を高める基盤づくりとも言えるのではないか。